

埼玉大学 東京ステーションカレッジ ハイブリッド開催

特別講演会

題目『＜奥＞の風景』～日本古典文学にみる「すまい」の建築論～

令和8年1月26日（月）15:00-16:40

1. はじめに

生産原論専門委員会では、毎年、総会後に著名な講師をお招きして特別講演会を開催しています。今年は日本古典文学から、建築論を構築するユニークなご研究をされて博士（工学）を取得された川本 豊氏を講師にお招きしました。

2. 研究会の概要

2026年1月26日(月) 15時00分から16時40分まで、埼玉大学東京ステーションカレッジにて開催されました。講師の川本氏は神戸在住なので、今回はハイブリッド開催になりました。参加者は13名でした。

川本氏は、京都大学工学部建築学科をご卒業後、神戸市にて建築設計業務に携わりつつ、佛教大学大学院文学研究科に社会人入学しています。そこで日本中世の古典文学を通じた「住まい感覚」の精神史的考察についてご研究をされました。さらに「建築論の京都学派」の視点から、これを深化させ、福井工業大学で博士（工学）号を取得されています。川本氏のユニークな研究成果の一端を、素人でもわかりやすく解説頂くことにしました。

3. 講演概要

「住居（建築）」をめぐる問題は、物理的なハード面と精神的なソフト面の両義的視点が必要不可欠です。建築学を大きく超えて、国内外を問わず家政学・民俗学・歴史学・地理学・思想史学など学際的探究の立場で捉えることが重要です。ここでは、日本人の「すまうこと（住居観）」の建築論的究明をめざす新たな試みとして、日本古典文学作品をテキスト（読み解かれるべきもの）として扱うことにしました。そこには、心身一如とする東洋的な身体論をふまえた「住まい感覚」、日本語独自のニュアンスをもつ「奥」、中世をピークとする日本人の心性としての「冥－顕」世界イメージといった視点が含まれており、それが本研究の独自性となっています。

研究の立場としては、「建築論の京都学派」が基礎となっています。京都学派とは、京都大学建築学科の知的原風景として武田五一を基とし、分離派メンバーの一人であった森田慶一、その継承者である理論家の増田友也（1914-

1981）、田中喬（1934-2018）へと繋がる一派を指します。

私の研究は、日本の住まいにおける壁（仕切り）の問題、死生観の変化「聖性（象徴性・超越性）を持ち得なくなった」現在住居の実相的な問題を踏まえつつ、京都学派の増田友也の独特な「壁－隔離」（半－隔離ともいわれる）に関する初期の論考や、田中喬の独自の視座となった「うつす」（写す、映す、移す）という言葉を参考にして「家」を考察し、「すまうこと」の現象、その「風景」へと理論を展開させました。その中で、日本的な「奥」という言葉の内に含まれる空間性と時間性に着目しました。それと近代以降看過されてきた「冥－顕」の世界構造にも着目し取り上げました。なぜならば、「冥－顕」の世界は近年頻発した未曾有の大災害を契機に学際的な研究対象として再びクローズアップされているからです。

具体的な研究方法としては、日本古典文学作品をテキストとして、その作品の読解・分析を通して、「建築的な事象」の建築論的考察を試みました。すなわち、その事象とは、さまざまな時代における「住まい」の形態や「すまうこと」の現象、精神史（心性史を含む）、その風景なるものを指しています。この試みの根拠は、文学作品の中に表出される言葉（文字）から何気なく（日常的な表現）現れ出る深層レベルの心性を抽出し、表層の形態を再照射し、“失われつつある「住まい」が本来持っていた象徴性（聖性）”を再浮上させることができるのではないかと考えたからです。この視点において工学的な意義を見出せると思っています。

4. おわりに

お忙しいなか膨大な資料をご準備頂き、ご講演頂いた川本 豊博士に心より御礼申し上げます。次回は**令和8年3月17日～19日**、埼玉大学で開催される春季大会の生産原論セッションとなります。10件の発表が予定されています。また、19日には戸高一成氏（大和ミュージアム館長）の基調講演もあります。万障お繰り合わせの上、ご参加頂ければ幸いです。なお、詳細は委員会HPをご覧ください。
<https://spe-lab.mech.saitama-u.ac.jp/principle/pm-index.html>

委員長 池野順一（文責）